

<東北地区納税貯蓄組合連合会会長賞>

## 人々を支える税金

二本松市立二本松第一中学校

2年 武藤 ひかり

私は今月からおこづかい制になった。今までは欲しいものは親に買ってもらっていたため「消費税」についてあまり考えたことがなかったが、これからは毎月、自分の欲しいものを2千円の範囲で吟味しながら買わなくてはならない。2千円をもらうと160円は消費税になる計算だ。それが積み重なると大きな金額になるだろう。

正直私は、「納めたぶんが全て自分に返ってくるとは限らないのに、どうして納める必要があるんだろう」と思った。しかし、本当に納めても何も利益がないのだろうか。

税について調べてみると、消費税は社会保障の財源となる、ということが分かった。社会保障とは国が生活を保障してくれる制度であり、つまり社会で懸命に働き引退した人々の生活を支える年金、高齢化による社会保障費の自然増などに充てられているのだ。

私は祖父母とは別々に暮らしているが毎日のようにお世話になっており、夏休み中などは昼食を作ってもらったり、習い事の送り迎えをしてもらったりと色々と面倒をかけている。祖父母は80歳を越えて高齢で、特に祖母は足が悪いなど、生活の中で手伝わなければいけないなと思ったりすることがあるが未だに、支えることができている、自分が役に立っていると感じたことがない。私は何も助けになるようなことをしていないと思っていたが、私たちはおこづかいを使って買い、消費税を納めることで祖父母などの高齢の方たちの生活を支えていることを知った。

私は、消費税は「納めるもの」「必要なもの」という認識だけではなく、「こうした人々の生活を支えているもの」ということを意識してこれからも生活していきたい。

私が社会に出て働くようになれば、私が今納めている消費税の他に様々な税を納めるこ

とになるだろう。そしていずれは、祖父母の様に社会保障を必要とする世代になる。私たちが今納めている税金は社会保障として高齢の方を支えているが、将来は私たちが支えられることになるのだ。

私たちは今から社会を担う一人だということを自覚することが大切だ。

高齢社会がこのまま進めば、消費税を含めた税収全体の減少が懸念されるだろう。したがって、税金を納めて社会を支えるべき人がその役割をはたさなければならない。そして私たちが歳をとり働かなくても生活できる、次の世代が支えてくれるというサイクルがうまく機能する社会を目指さなくてはならない。